

「安心しなさい。わたしだ。恐れることはない」

(マタイによる福音書 14:22-33)

聖書では、教会のことを舟にたとえることがしばしばあります。日本聖公会宣教 150 周年記念礼拝のテーマが「こぎ出せ、沖へ」であったこと表されているように、今も教会は舟にたとえられます。今日の福音で「湖」と訳されている単語は「海」と訳されるのと同じ単語です。海は神の創造の力に敵対する原初の水、混沌を連想させます。今日の福音でも、神の力に敵対するあらゆる力を、湖は象徴的に表しています。逆風や波は、教会を混乱に陥れ、前に進むことを阻む力を表します。主イエス昇天の後、弟子たちが教会を担います。しかし、その歩みは決して平坦ではありません。嵐のなかで一晩中漕いでも進まない、そういう非常に厳しい現実が待っています。その現実のなかで教会は、「幽霊だ」と、主イエスをも見誤ってしまうのです。ペトロのように信頼したくても、強い風が吹くと信頼と恐怖に心が分かれてしまい、沈みかけてしまう。それは非常にリアルな信仰共同体の姿です。しかし、今日の福音は主イエスがいかなる時にも教会を見捨てず、救ってくださることを伝えています。主イエスは湖を歩いて、教会を救いに来てくださるのです。「幽霊だ」と恐れる弟子たちに、「安心しなさい。わたしだ。恐れることはない」と言って近づいてくださるのです。そして、ペトロが叫んだ途端に、主イエスは手を伸ばしてくださるのです。

わたしたちはただ、「来なさい」という主イエスの招きに応え、それでも怖いときには主イエスに「助けてください！」と叫ぶことができるなら、もう主イエスの手はわたしたちを掴んでくださっています。そして、主イエスと共に再び舟に乗り込むならば、嵐は収まり、どんなに漕いでも進まなかった舟が前へ進みます。混沌、神に敵対する力が猛威を振るう場の象徴としての海に対して、神と出会う場としての「山」があります。一人山の上で神との交わりに身を置く主イエスだけが、荒れる海を静めることができます。そして、その主イエスが共におられるからこそ、舟は前に進むことができます。